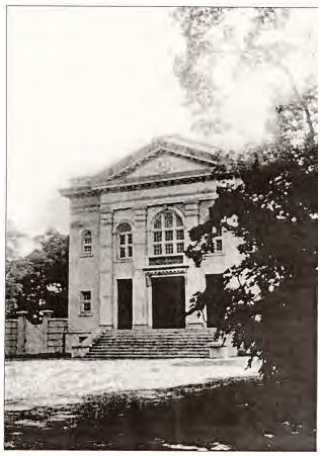
南葵音楽文庫ミニレクチャー

南葵楽堂（南葵文庫附属大礼紀念館）開館 100 年！

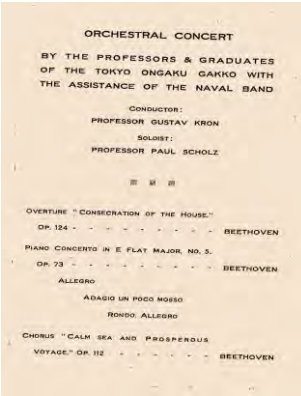
林 淑 姫

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

2018 年 10 月 27 日（土）11：00
南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）



南葵文庫附属大礼紀念館
（南葵楽堂）



ORCHESTRAL CONCERT
BY THE PROFESSORS & GRADUATES OF THE TOKYO ONGAKU GAKKO WITH THE ASSISTANCE OF THE NAVAL BAND
CONDUCTOR:
PROFESSOR GUSTAV KRON
SOLOIST:
PROFESSOR PAUL SCHOLZ

OVERTURE "CONSECRATION OF THE HOUSE." OP. 124 - - - - - - - - - - BEETHOVEN
PIANO CONCERTO IN E FLAT MAJOR, NO. 5. OP. 73 - - - - - - - - - - BEETHOVEN
ALLEGRO
ADAGIO UN POCO MOSSO
RONDO: ALLEGRO
CHORUS "CALM SEA AND PROSPEROUS VOYAGE." OP. 112 - - - - - - - - BEETHOVEN

第一回演奏会プログラム
（1918.10.27,28 7:30 p.m）
＊英文　ほかに田村寛貞執筆の曲目解説を配布。

1918（大正7）年10 月 27 日（日）、東京飯倉の紀州徳川家では 3 か月前に落成した南葵楽堂（南葵文庫附属大礼紀念館）の開館式が行われていました。南葵楽堂はこの日から、わが国最初のクラシック音楽専門の演奏会場として活動を開始します。英国風の瀟洒な佇まいをみせるこの音楽堂は、関東大震災により閉鎖を余儀なくされるまでの 5 年間、短い期間ではありましたが、ヨーロッパ音楽の精神性を格調高く伝えるシンボリックな場として存在し、日本の近代音楽史にその名を刻んでいます。

開館式が行なわれた当日は未明から秋雨の降り続くあいにくの天候でしたが、午前 9 時 30 分より、来賓 200 名を迎えて開会しました。南葵文庫庫主徳川頼倫は式辞で、「南葵文庫に音楽の場を設けることにより智徳両様の涵養に資することができるであろう、そして書籍閲覧が目よりする教養とすれば、耳を以てする修養には音楽とともに講演講話がある。紀念館はこの両者を結合する場」であると述べています。来賓には宮内大臣や文部大臣とともに山川健次郎東京帝大総長、大隈重信早稲田大学総長、鎌田榮吉慶應義塾塾長など大学関係者や文化人が多く参集し、期待を籠めた祝辞が次々に寄せられました。続いて庫主自らの案内で館内を披露したあと、文庫本館に会場を移して祝賀の宴も開かれ、夕刻、「歓呼の間に滞りなく式を終えたり」と関係者は伝えています。

そして夜 7 時 30 分より、南葵楽堂第 1 回演奏会が開催されます。曲目はいずれも本邦初演のベートーヴェン作品、管弦楽および合唱は G.クローン（Gustav Kron, 1874-?）指揮による東京音楽学校管弦楽団および合唱団、頼貞が愛してやまないピアノ協奏曲「皇帝」（全曲初演）のソリストは P.ショルツ（Paul Scholtz, 1889-1944）でした。残念なことに、頼貞は数日前からインフルエンザに罹って寝込んでおり、待望のこの日、セレモニーも演奏会も欠席を余儀なくされたのでした。

南葵楽堂（南葵文庫附属大礼紀念館）開館まで

1914（大正 3）年　徳川頼貞、ケンブリッジで音楽堂建設（パイプオルガン設置）を構想。留学中指導係を務めていた小泉信三の全面的な賛同と支持を得て、父頼倫に提案の書簡。

1915（大正 4）年　4 月、頼倫、南葵文庫附属の講堂兼音楽堂「大礼紀念館」設置を決定。頼貞、A.B. トーマス（Alfred Brumwell Thomas, 1868-1948）に設計を、恩師ネイラー博士を通じて、アボット・スミス（Abbott and Smith）社にパイプオルガン製作を依頼。12 月 7 日、頼貞帰国

1916（大正 5）年　秋、トーマスより設計図到着。日疋信亮（1858-1940）の助言により、近江八幡在住のアメリカ人建築 W.M. ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880-1964）にトーマス原案をもとにした最終設計図を依頼。

1917（大正 6）年　3 月 24 日、地鎮祭執行、起工。

1918（大正 7）年　7 月 30 日落成。10 月 27 日、南葵文庫附属大礼紀念館開館式挙行。第 1 回演奏会開催（28 日と両日）。11 月 9, 10 日　学術講演会開催（テーマ「力」）。姉崎正治「同情と渇仰」、桑木嚴翼「知識の力」ほか。

参考文献『南葵文庫報告』第 10, 第 11（大正 7.10, 大正 8.10）
徳川頼貞『薈庭楽話』（春陽堂, 昭和 18）、同『頼貞随想』（河出書房, 昭和 31）